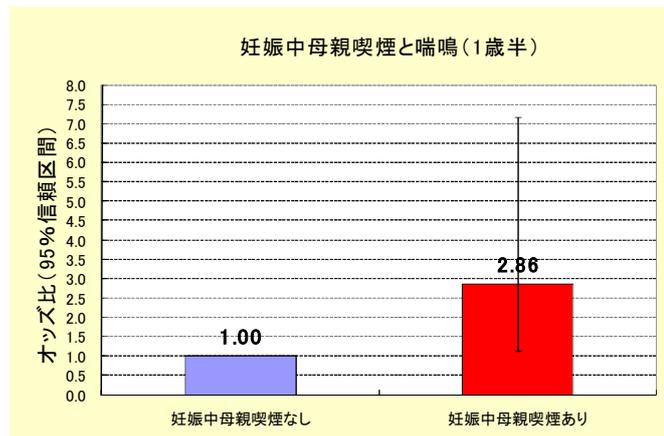


大阪母子保健研究 16-24 ヶ月時追跡データの結果 周産期喫煙曝露と喘鳴及びアトピー性皮膚炎のリスクとの関連

背景：受動喫煙がアレルギーのリスクを高めるかどうかについて、議論が続いています。今回、妊娠中の母親の喫煙と生まれた後の子の受動喫煙が1歳時の喘鳴、喘息及びアトピー性皮膚炎発症に影響するかどうかを検討しました。

方法：大阪母子保健研究のベースライン調査、第1回と第2回追跡調査（生後16-24 ヶ月時）に参加した763名を対象としました。ISAACの疫学的診断基準に基づき、喘鳴とアトピー性皮膚炎を定義しました。さらに、医師診断喘息及び医師診断アトピー性皮膚炎も定義しました。母親の年齢、年収、両親の教育歴、両親のアレルギー既往、屋内ペット、追跡調査時期、年上兄弟数、性別、出生時体重を補正しました。

結果：妊娠中の母体の喫煙は、生まれた子の生後16-24 ヶ月時における喘鳴、医師診断喘息、アトピー性皮膚炎、医師診断アトピー性皮膚炎いずれとも有意な関連を認めませんでした。出生後に子のいる部屋での母親の喫煙は、喘鳴のリスクを2.9倍高めましたが、医師診断喘息とア



トピー性皮膚炎（ISAAC、医師診断とも）と統計学的に有意な関連を認めませんでした。出生後の母親以外のだれかが子供と同じ部屋で喫煙することは、喘鳴、喘息、アトピー性皮膚炎とも関連がありませんでした。

結論：出産後の母親の喫煙は子の喘鳴のリスクを高めるのかもしれませんが。

出典：Tanaka K, Miyake Y, Sasaki S, Ohya Y, Hirota Y, The Osaka Maternal and Child Health Study Group. Maternal smoking and environmental tobacco smoke exposure and the risk of allergic diseases in Japanese infants: the Osaka Maternal and Child Health Study. J Asthma. 2008; 45: 833-838.